

原著論文

メダリストにとってのオリンピック：
ロス五輪からベルリン五輪へ向かう清川正二とその周辺¹

尾川 翔 大（スポーツ危機管理研究所）²

Abstract

Masaji Kiyokawa won a gold medal at the 1932 Los Angeles Olympic Games. He aimed to win another gold medal at the Berlin Olympic Games four years later. This study discusses Masaji Kiyokawa's experiences during the four years between the Los Angeles Olympics and the Berlin Olympics, where he aimed to win his second gold medal.

Medalists who returned from the Los Angeles Olympics received a warm welcome when they participated in the 1932 national championships. Very few critical opinions were expressed at these championships. However, from 1933, much was expected from the Medalists. Individual Medalists' conditions were discussed before a tournament, and they were evaluated based on past records after the tournament. If their records were not good, they were considered failures. Even if they did not participate in a tournament, they were mentioned as a reference point for record purposes. If a promising player emerged, they were positioned in comparison as seniors. Masaji Kiyokawa himself experienced such evaluations.

Kiyokawa spent his Olympiad as a Medalist. While this four-year period was one of continuing evaluations for Kiyokawa, it can also be considered a period that reinforced his awareness of the Olympic Games as an event that is only held once every four years.

抄録

清川正二は、1932年のロサンゼルスオリンピックで金メダルを獲得した。そして、4年後のベルリンオリンピックでも再び金メダルを獲得することを目指した。本研究は、ロサンゼルスオリンピックからベルリンオリンピックで再び金メダルを獲得することを目指した清川正二にとっての4年間の経験を論じるものである。

ロサンゼルスオリンピックから帰国したメダリストたちは、国内大会への参加を通して歓迎を受けた。1932年の大会では、批判的な見解はほとんどなされなかった。しかし、1933年以降からは、メダリストに対して大きな期待がかけられるようになった。個々のメダリストの状態については、

¹ The Olympiad as Seen by the Medalist: Masaji Kiyokawa and his surroundings from the Los Angeles Olympics to the Berlin Olympics

² Ogawa Shota, Research Institute for Risk Management in Sport

大会前から話題に挙がり、大会後には過去の記録に基づいて評価される。記録が良くなければ、不調とみなされる。大会に出場していなくても、記録の参照点として持ち出される。有望な選手が台頭すれば、古参と位置づけられて比較される。そうした評価を、清川自身は目にしていたのである。

清川は、「メダリスト」としてオリンピアドを過ごした。この4年間の経験は清川にとって評価され続けることであるとともに、オリンピックが4年に1度という認識を強化するものであったと考えられる。

Keywords: Medalist, Masaji Kiyokawa, Olympiad, Japan's national teams, swimming

キーワード：メダリスト、清川正二、オリンピアド、日本代表、競泳

はじめに

清川正二は、「昭和七年のロサンゼルスオリンピック大会で優勝して金メダルをとったら、人間というのは面白い動物で「この次のオリンピックでもう一度、金メダルをねらってみよう」という気持ちになりました」¹⁾と述べている。1932(昭和7)年のロサンゼルスオリンピック競技大会(以下、ロス五輪)の100M背泳ぎで金メダルを獲得した清川正二は、続く1936(昭和11)年に開催されたベルリンオリンピック競技大会(以下、ベルリン五輪)において、同じ種目で銅メダルを獲得することになるのだが、清川にとって、この4年間はどのような経験だったのだろうか。清川は、ロス五輪からベルリン五輪に至るまでの「四年間にはいろいろな変化が起きました」²⁾と回顧している。

清川正二の名が知れ渡る画期は、1929(昭和4)年のことである。この年に開催された浜名湾遊泳協会主催の全国競泳大会の100M背泳ぎに出場した清川は、3位に入賞した。当時の浜名湖は、内田正練や野田一雄をはじめとしてオリンピックに競泳の選手を輩出する拠点と認識されていたことから、この競技大会も名が知られており、ここで優れた成績を残すことは水泳界での関心を集めることに繋がっていたのである³⁾。その後、清川は出場する各全国競泳大会で優れた成績を残し続け、さらに、ロス五輪に向けて日本代表選手を選

考する最終予選で優勝して日本代表選手に選出され、そして、ロス五輪で金メダリストになった⁴⁾。

いっぽう、1930年前後の日本では、清川の名前が知れ渡る土壌が整えられつつあった。この時期、スポーツが大衆化の兆しを見せ始めるとともに、東京市が1940年のオリンピックを東京に招致するための運動を始めていた。さらに、ロス五輪に向けて大日本体育協会(以下、体協)、メディア、企業、後援会、皇室などの支援体制が整えられ始めており、それを背景に選手団の規模が一挙に拡大するとともに、オリンピックやオリンピックに対する関心も高まっていた⁵⁾。

ロス五輪に向けて、競泳は、これに関わる日本の役員や選手から金メダルの獲得を期待されており、日本にとっても重要な意義をもつものと考えられていった⁶⁾。さらに、スポーツ医学者と競技団体の結びつきが強まるとともに、スポーツ医学の研究が選手の競技力向上に有効であることが示され、その成果は競泳をはじめとして積極的に活用されていった⁷⁾。この期待や後押しのなか、ロス五輪で日本は18個のメダルを獲得したのだが、このうち12個までが競泳で獲得したものであった。日本の男子競泳では、6種目中5種目で1位と2位を独占し、そのうち100M背泳ぎでは3名が表彰台に立ち、国内外に「水泳大国」を印象づけることになった⁸⁾。そして、100M背泳ぎで金メダリストになった清川は名前と顔が広く認知されることになり、2位の入江稔夫と3位の河津憲

太郎とともに「背泳トリオ」と呼称されるようになる。

では、ロス五輪で金メダリストとなり、人びとに知られるようになった清川に対して、どのように問いかけることができるのだろうか。清川は「ある意味で、ゴールドメダリストは、重たい人生です（笑）」⁹⁾と述べたことがある。本稿ではこの清川の言葉を基点にして、清川がいう「重たい人生」の一部としてのロス五輪からベルリン五輪にかけての4年間の、どのような経験だったのかを問うてみることにしよう。それは、山本須美子が「スポーツの歴史は、スポーツをする人びとによって構成されてきた」ことから「スポーツをする人の内側からの視点も重視する必要がある」¹⁰⁾と述べたことと符合している。

ロス五輪で「水泳大国」を国内にも国外にも印象づけた日本の競泳陣には、様々な関心が寄せられることになる。ロス五輪を終えると、すぐさま、4年後のベルリン五輪で再び数多くのメダルを獲得することへの期待が高まり、日本水上競技連盟（以下、水連）もベルリン五輪に向けて諸種の取り組みを実施していくことになる。ロス五輪でセンセーショナルな活躍をした個々の選手たちにも関心が集まることになり、メダリストになった選手たちには「メダリスト」としての眼差しが向け

られることになる。道を歩けば人びとから視線を向けられ、人に会えば大きな期待をかけられ、メディアをみれば評論の対象にされている。メダリストとしてのインパクトが強ければ強いほど、その個人の社会的属性として他でもない「メダリスト」であることが強く刻印されることになる。メダリストは社会的な存在であり、そのためにその個人に様々な関心が寄せられることになる。メダリストが経験するものは、個々人で様々であれ、そこにはメダリストだからこそその経験がある。清川が2大会連続で金メダルを目指すことは、「メダリスト」であるという社会的属性を引き受けながら、4年間の競技生活を送ることである（表1）。

また、オリンピック競技大会の開催が4年に一度であるために、2大会連続で金メダルを目指すことは、4年間の時間制限付きの世界に身を置くことである。ここでは、日常生活の一つひとつが次回大会で金メダルを獲得するために、いかに有意義であるのかに方向付けられていくことになる。4年間に進学や就職などの人生上のターニングポイントを経験して、ライフステージを移行させながらも、それらと折り合いを付けながら競技生活を送ることになる。そして、1年をどのように過ごすのか、あるいは、1日をどのように過ごすのか、そして、日々の練習計画や出場する大会

表1 1932～1936年の清川正二の大会への出場の記録

大会名	日程	成績	種目	タイム
第10回オリンピック競技大会最終予選	1932年6月11～12日	優勝	100M 背泳ぎ	1分10秒0
第10回オリンピック競技大会（ロス五輪）	1932年7月30日～8月14日	優勝	100M 背泳ぎ	1分8秒6
第11回全国学生水上競技大会	1932年9月23～25日	優勝	100M 背泳ぎ	1分10秒2
昭和7年度全日本水上選手権大会	1932年9月30～10月2日	優勝	100M 背泳ぎ	1分10秒8
昭和8年度全日本水上選手権大会	1933年8月12～14日	優勝	100M 背泳ぎ	1分11秒0
第12回全国学生水上競技大会	1933年9月15～17日	優勝	100M 背泳ぎ	1分10秒6
第10回極東選手権大会	1934年5月12～20日	準優勝	100M 背泳ぎ	1分11秒3
昭和9年度全日本水上選手権大会	1934年8月11～13日	準決勝敗退	100M 背泳ぎ	
第13回全国学生水上競技大会	1934年9月14～16日	準決勝敗退	100M 背泳ぎ	
第2回日米対抗競技大会	1935年8月17日～19日	4位	100M 背泳ぎ	
第14回全国学生水上競技大会	1935年9月13～15日	優勝	100M 背泳ぎ	1分10秒6
第8回明治神宮競技水上競技大会兼昭和10年度日本選手権水上競技大会兼オリンピック第2回予選会	1935年10月4～6日	3位	100M 背泳ぎ	1分11秒4
日本競泳選手権大会オリンピック最終予選会	1936年5月29～31日	3位	100M 背泳ぎ	1分11秒4
第11回オリンピック競技大会（ベルリン五輪）	1936年8月1～16日	3位	100M 背泳ぎ	1分8秒4

清川正二『私のスポーツの記録－オリンピックと共に半世紀－』ベースボール・マガジン社、1984年、pp.258-262より作成

スケジュールもベルリン五輪を見据えて組み立てることになる。それはベルリン五輪を逆算した日々である。ロス五輪で金メダリストになり、次回大会のベルリン五輪で再び金メダルを目指す清川は、そうした日々を生きることになる。

本稿では、1932年のロス五輪で金メダルを獲得し、そこから4年後のベルリン五輪で再び金メダルの獲得を目指した清川正二にとっての4年間の経験について、清川が出場した大会を中心として、水連を中心とする清川を取りまく諸アクターとの関係性のうちに論じることしよう。いうなれば、メダリストにとってのオリンピアド¹¹⁾である。

1. ロス五輪からの帰国ー水連の計画と選手の展望ー

1ー1. 水連幹部の挨拶と4年後のベルリン五輪に向けた計画

ロス五輪における日本選手団の活躍により「國民の熱狂はその強度に達し、スポーツを解すると否にかゝらず擧げてロサンゼルスからの通信をまちあぐんだ」¹²⁾のであった。ロス五輪における日本選手団の影響の大きさをみてとることができる。このなかでも、水連幹部は清川、入江、河津が表彰台に並んだ「百餘背泳で初めて全日本國民の待望に報いることが出来た」¹³⁾としている。

日本国内におけるロス五輪への熱狂により、帰国の途につく選手団は華々しく迎えられることになる。日本代表の第一陣は9月3日、第二陣は9月8日に帰国した。競泳組は第二陣に含まれており、9月8日に帰国した。選手団を歓迎する会をまず開いたのは東京市であった。選手たちは横浜港に到着すると、東京に向かった。そして、東京市長をはじめ、多くの関係者が列席するなか、日比谷公会堂での歓迎式典が開催された。その後、競泳陣は神宮プールに向かい、ここで午後4時半から水連主催の歓迎報告会が開催されたのである¹⁴⁾。

この神宮プールでの歓迎報告会では、文相の祝

辞や水連関係者の挨拶がなされ、選手はエキシビションで泳ぎを披露した。この場で水連会長の末広厳太郎は、ロス五輪において「絶大なる光榮を荷負つて凱旋された諸君が、今や世界水泳界の第一人者として世界の水泳を指導すべき重い地位に立つに至られた」として競泳陣の活躍を総括し、これとともに「次のオリピックに備へる爲めには又初めから根氣よく新しい一層大きなピラミッドを築いて其尖端を高く高く世界水泳の水準線上に聳えしめる覺悟がなければならない」とした¹⁵⁾。

また、代表コーチの松澤一鶴は「思へば第十回オリピック大會を終了した時、我々水泳チームの者は「此の若い元氣な優勝者等が衰へると云ふ様な感じはしないが、更に次回に勝つ爲には此等の人達が依然としてスターであつては危い。此等の人達が経験者として中堅となり最悪の場合の殿を承る位で更に前線を確保するだけの新進を加へたチームを伯林へ送らねばならぬ」と感じた」¹⁶⁾と振り返っていたこともある。このように、水連は「水泳大国」であり続けるために、ロス五輪を終えて間もない時点から、4年後のベルリン五輪を見据えていたのである¹⁷⁾。

そして、ベルリン五輪に向けた水連の活動計画が示されることになる。末弘は、水連の1932(昭和7)年の定例代議員会で「これからは次のオリピックを目指し、或る目標を定め、此れに向つて計畫的に活動して行きたい」¹⁸⁾とした。そして、ロス五輪に向けた「過去四年間は男子競泳を目標にオリピック第一主義を唱へて實行した結果成功したが、今後は水泳、水上競技の全種目に對して夫々目的を定め」とともに、「水泳、水上競技の全國的普及運動」や「地方で芽生えた選手たちをも一層より導く」ことを構想した¹⁹⁾。具体的な方法については、「連盟から地方へトロフィー等を出して奨励方法を講ずるのも一策であらうし、又聯盟から地方によき指導者を派遣する事、指導フィルムを作製する事等」²⁰⁾が提示された。

いっぽう、水連が指導を求められるケースも増えていくことになる。日本が「水泳大国」である

と認識され「日本水泳の聲價が一段と世界に擴がると、日本選手を招聘し度いとか、コーチに来て欲しいとか、日本の水泳の秘訣を知らせてもらひ度いとか實に種々な申込に接する」ようになり、「以前日本に招かれた選手等から其の歡迎振りを聞き傳へ、是非日本でコーチでも何でもし度いから頼むといふ恐れいつた蟲のよい連中も返事に忙殺される程澤山ある」し、「日本のニュースや指導法等を訪ねて、来て居る者に至つては無數である」という。そして、「斯んな意味から日本の實力や制度を機會ある毎に各國の要路に知らせ、交換的に向ふの情報も取る仕事を續けて來たし、此の雑誌（『水泳』－引用者注）も前號からは英文解説を附して各國に配布することにした」のである²¹⁾。

1－2. ロス五輪からの凱旋－競技大会での活躍－

ロス五輪で活躍した選手の多くも、次回のベルリン五輪に照準を向け変えていくことになる。帰国後間もなく清川は「果たして次のベルリンの大会には今度程充実したチームは作り得ないかも知れない。又反対に今度以上に充実したチームを持って行くかも知れない。が、とにかくこの次の時にもその選ばれた人達はこの精神だけはよく了解して忘れずに持って行かれむ事を希望する。勿論私自身でも事情の許す限り次の大会への希望を持っている」²²⁾と述べている。

そして、選手たちはロス五輪を終えて帰国してから、立ち寄る先々で歓迎を受けるのだが、それとともに、自らが選手として大会に出場することを通して歓迎を受けることになる。ロス五輪における「水上制覇の秋を謳歌してゐるかの感」がある1932年9月23～25日の3日間に神宮プールで第11回全国学生水上競技大会が開催された。ここで「各選手共に母校の名譽を擔つて大いに活躍し學生の意氣を示し、殊にオリンピック選手連は心身の疲勞をも消し飛ばし奮闘された」のである²³⁾。この競技大会は学生の大会なのだが、注目

はロス五輪で活躍した選手たちに注がれている。このとき名古屋高等商業学校に在学していた清川は、「凱旋試合」ともいうべきこの大会で50M背泳ぎと100M背泳ぎに出場し、それぞれ31秒6と1分10秒2というタイムで優勝した。100M背泳ぎのタイム自体はロス五輪と比べて落ちるのだが、ロス五輪から帰国してから2週間後の大会であることから疲労が考慮されていることもあるが、この時点では、オリンピックが觀衆の目の前で大会に出場し、金メダリストの清川が順当に優勝したことが重要であった。清川が泳ぐことそれ自体に人びとは関心を寄せたのである。

さらに、全国学生水上競技大会から1週間後「本年度の水上競技總決算」とされる昭和7年度全日本水泳選手権大会が9月30日～10月2日の3日間、神宮プールで開催された²⁴⁾。しかし、この大会では事情が異なっていた。この大会は日本で最も高い競技力を競う大会であることから、「ロサンゼルスに水上日本の旗を輝した我水上の精鋭と更にオリンピック選手を破るべく精進した各選手が一堂に會して過る日以上の活躍を示し、立派なレースをして呉れるのであらうと期待」されていた。しかし、「オリンピック選手の参加は男女をこめて僅か六、七名に止つて近年盛大を極めてゐた本大會も非常に淋しいもの」となり、「一週間前に活躍したインターカレ選手が殆ど顔を見せなかつた」のである。その理由の一つには各大会の開催日の間隔が狭いため、特に地方在住の選手は繰り返し神宮プールへ移動することで調子を整えることに苦慮することが考えられる。また、競泳大会を開催可能な温室プールも設置されていないため、10月に入る時期では屋外プールの水温も懸念事項であった。それゆえ、「インターカレ大會と選手権大會との期日に一工夫をしなければなるまいと考へられ」てもいたのである²⁵⁾。

それでも、清川は第11回全国学生水上競技大会に続いて、この昭和7年度全日本水泳選手権大会に出場していた。清川は、何名かの選手がロス五輪以降の大会を欠場するなか、大会への出場を

続け、100M 背泳ぎでは1分10秒8を記録したのである²⁶⁾。こうして、1932年の日本の水泳シーズンが幕を閉じたのである。

2. ベルリン五輪への準備—各年のサイクルと水連・選手の準備

2-1. ロス五輪からの切り替え—健在と新進を求める1933年—

ロス五輪の余韻が残る1932年の競泳シーズンを終えて冬に入り、この季節の練習について、松澤は「室内プールで泳ぎの練習を続ける事が出来ればこれに越したことはありません」とするが、「泳ぐべき室内プールを持たぬ人はこの期間は全然別な運動をやって差支へないでせう」と述べている²⁷⁾。そして、「特に蹴球や籠球が水泳のために悪いといふ結果があることは聞いてをりませんし」、「基本体操その他の競技會を実施して、シーズン中の水泳に代るだけの運動の分量をとる事、水泳に必要な筋力を維持する事、水泳に用ひない筋肉をも發達せしめる事、水泳だけやってをったのでは進歩の遅い能力で、しかも競技に入用なものを他の運動によって發達せしめる事等が大切な事」とした²⁸⁾。清川自身は「バスケットやランニング、サッカーも乗馬も、オールラウンドでやりました」²⁹⁾と回顧している。また、清川の練習内容には「尊敬する松澤監督の創造された」³⁰⁾ものも含まれている。ロス五輪に至るまで、松澤の下で代表合宿を経験していた清川は、引き続き松澤が考案した練習を実施している。なお、清川は「当時は一日二時間の放課後の練習で世界記録の水準にいたんです」³¹⁾と回顧している。

この時期の清川は東京YMCA室内プールを利用しており、「戸外プール使用可能の時機まで、はじめはあまり力を入れずに更にフォームの改善と、筋力の充實を圖り、戸外プールに出られるようになると同時に、五十メートルの水路に慣れること、及び今年の理想とするタイムに向つて研究される」³²⁾とのことであつた。清川自身は室内プールで練習できていたのだが、しかし、それを誰もが

利用できるわけではなかつた。「一口にシーズン初めの練習と云つても、室内プールを使用し、四月一杯まで室内で泳ぎ、五月初めから戸外プールへ出て正式練習を初める都會の選手と練習法と室内プールの設備も無く、前年の十一月から殆ど水に入らないでゐて而も四月中旬から直に戸外プールで練習を初めなければならない地方の選手のそれとでは自ら大きな差別があるのが當然だと思ふ」³³⁾と述べている。

冬の時期を過ぎて4月になると、清川は東京商科大学に進学した。そして、次第に気温が高まってくると、競泳大会が開催されるようになる。この時期の競泳は気温が低い季節に大会が開催されないで、水泳シーズンが明確である。およそ「六月下旬から九月」³⁴⁾が水泳シーズンと考えられていた。

6月11日に開催された早慶対抗水上競技は「東京における水上競技會の今年の初場」であり、「昨秋は疲勞のために充分活躍出来なかつたオリンピック選手達が氣分を一新して戦ってくれる」ことが期待されていた。そして、この大会では「結局中心競技である競泳に對しても興味の焦點は對抗競技としてよりオリンピック選手達を觀ることに注がれたといつてもよいのであらうし、そして彼等健在なりといふ證明を得た」のであつた³⁵⁾。

続いて6月17・18日に玉川プールで東都十二大学水上競技が開催された。この大会では「回を重ねて各校の陣容が整つて來るので對抗レースとしての興味も自然加はりつゝあるところへオリンピック選手の出場によって錦上花を添へダークホースの出現を待望して早慶戦につぐシーズン當初の好い競技會として期待されたもの」であつた。この大会には日大が出場しており、ここにはロス五輪の800Mリレーで金メダルを獲得した遊佐正憲が在学している。遊佐は100M自由形に出場して58秒2を記録し「オリンピック選手としての堂々たる貫禄を見せた」のである³⁶⁾。ここで挙げた2つの大会に清川は在籍する大学の関係で出場しているわけではないのだが、大学対抗の競泳大

会でありながらも個々のメダリストに関心が集まっていたようである。

そして、1933（昭和8）年8月12～14日に神宮プールで昭和8年度全日本水上選手権大会が開催された³⁷⁾。この年の大会は「雰圍氣の裡にこそ、日本一と勝名乗を挙げしめて甲斐ある會」³⁸⁾とされる大会であり、それは「遂に選手権爭覇に強く合はされて白熱した氣運を醸し出した」³⁹⁾のである。この大会で清川は男子100M背泳ぎと男子200M背泳ぎで優勝した。しかし、清川は優勝したにも関わらず「餘りよいタイムでない」とされたし、「背泳に見る後繼者が出ないといふ現象」も危惧されていた⁴⁰⁾。すでに、注目を集める清川は、優勝して「依然として第一人者である」⁴¹⁾と言われたとしても、過去の記録と比較されるし、いわゆる「背泳トリオ」の活躍が目立つことから後進の台頭が期待されている。

ロス五輪の競泳で表彰台に立った選手の中で、1933年の全日本水上選手権大会の表彰台に立ったのは、——種目がすべて一致しているわけではないが——清川正二、河津憲太郎、入江稔夫、宮崎康二、遊佐正憲、横山隆志、牧野正蔵、北村久寿雄、小池禮三、前畑秀子であった。ロス五輪で優れた成績をのこした選手の多くが、この大会でも表彰台に立ったのである。ただし、松澤一鶴は「今度の選手権大會の成績で早くもベルリンに對する準備成れりといふやうな掛聲を聞くことである、冗談ぢやないといひたくなる、ベルリンに行くためにはもっとあらゆる方面に對して準備しなければならぬ」⁴²⁾と警鐘を鳴らしていた。

いっぽう、8月26・27日に大阪市立運動場で全日本中等学校水上選手権大会が開催された。この大会は「全日本選手権、學生選手権と鼎立して水上日本の新鮮な分野を形成する」のであり、「宮崎、北村のオリンピックチャンピオンを始め水上日本の未來を固める構成分子が洩れなく蛸集參戰」したのである⁴³⁾。しかし、「「新人出でよ」と呼びかけてゐた背泳陣の扼腕も久しい事」とされ、「いつまでもオリンピックトリオの時代でもある

まい。先人に代る新しい人達の力強い飛躍こそ眞の光明と希望を投げかける」といわれていた⁴⁴⁾。

これに続いて9月15～17日にかけて開催された第12回全国学生水上競技大会では、全日本選手権大会に出場して活躍した小池、牧野、北村、宮崎などの「わが水上日本の擁する一部至實選手の顔觸の缺けたためか全日本選手権の好レースと好レコード續出に食傷した結果か水上日本の最高峰を行く大競技會としては珍しく不入りであった」⁴⁵⁾という。8月の日本選手権大会で優れた成績を残したものは、学生水上競技大会への出場を控えたのである。その一因と考えられることは、「水泳では一シーズン中、一つの競技會で本調子を出せば、他の競技會で再びこれを繰返すことは殆ど不可能であると言ふことが、日本水泳選手の常識」⁴⁶⁾であったことである。したがって、それぞれの事情はあるにせよ、学生選手にとっては、全日本水泳選手権大会と全国学生水上競技大会に大会として大きな序列はなく、学校代表の成績というよりも、個人の成績という面が重視され、水泳シーズンの中で優れた成績を残すことに主眼が置かれていたとみなすことができる。それでも、清川は、この大会の50M背泳ぎや100M背泳ぎに出場し優勝した⁴⁷⁾。

そして、1933年の水泳シーズンを締めくくる明治神宮大会が9月30日と10月1日に開催された。ここで清川は、選手代表として宣誓した⁴⁸⁾。この大会で、水連は2つの目的を設定した。第1は、優れた記録を樹立することである。この時期、「國際水上聯盟は500米以下の競泳に於ては短水路記録長水路記録を區別せず同一視して公認してゐるに反し、我が國には長水路記録を以て公式記録としてゐる。従つて、我が國の記録は實質的には世界記録を凌駕せるものがあるにも拘らず短水路記録に覆はれているものが多い。依つて我が水泳選手が短水路で泳げば世界記録を出す力は十二分にあるのだといふことを實證する」⁴⁹⁾ことである。実際、短水路を使用したこの大会で多くの世界新記録が樹立され、清川は400M背泳ぎで5分30

秒4の世界新記録を記録した⁵⁰⁾。

第2は、有望な選手を発掘することである。水連からすれば「今年の選手権大会は真に遺憾なきまでに、全日本の精鋭を集め盡してその眞價を發揮する事が出来た」ので、明治神宮大会には別の目的が設定されたのである。それは、「日本の水泳のより一層強化を計るための国内普及」であり、「將來の水泳日本を引受けるべき第二報の精鋭のために機會を作りたいといふのが根本方針」とされたのである。この構想のもと、「青年團及び海軍競技だけでも既に十分なプログラムであると思ひ、これを中心に舉行し、こゝに副ふるに一般競技を以てした」のである⁵¹⁾。こうして、ベルリン五輪を見据える水連が一つひとつの大会への影響力を高めていくにつれて、一つひとつの大会にそれぞれの役割が課されていくことになる。

1933年の水泳シーズンが幕を閉じた。田畑は1933年を振り返り、遊佐のシーズンを通じた活躍に注目している。遊佐は「六月下旬から九月まで全シーズンを通じて自分の力を持續し」たのであり、「練習の仕方と氣持の持方では全シーズン中、何時でも本調子を出し得るといふこの遊佐君の實例」への注目である⁵²⁾。それまでは、良い成績を残せるのはシーズンに1度というのが水泳界の常識とされていたのであるが、遊佐はそうした常識の再考を促す成績を残したのである。

2-2. 苦悩する清川正二ー1934年のスランプー

1934年もベルリン五輪に向けて、水連は引き続き水泳の普及に努め、選手は競技会に出場することになる。水連は「今年度の主なる競技會の日割は水上聯盟から發表」し、それによって、選手は「個人として或はチームとして今年度はどの競技會と、どの競技會に出場するかを定め、そしてその中でも一番大切な、最も頑張らなければならないのはどの競技會だと云ふことを定め」ることになり、そして、「何日と何日にレースがあるか、決定致しますのでそのレースに最もよい調子を持つて行く様、シーズン中一貫した練習の根本

方針を立てまして大體の練習スケジュールを作ることになる⁵³⁾。水連が年間スケジュールを立て、選手は水連が立てた年間スケジュールを参照し、それに基づいて出場する大会と日々の練習を計画する。

この年は、第10回極東選手権競技大会が1934年5月12日～20日にマニラで開催された。この大会の100M背泳ぎの結果として、優勝は河津憲太郎、2位は清川正二、3位は明文一、4位は入江稔夫であった。ここで「年少の明が背泳トリオの牙城の一角に喰ひ入って三等に入選したのは賞讃に値する」⁵⁴⁾とされた。一方、2位の清川については「最近軀の調子のよくない清川、暫く休養して斯界のために盡力されんことを望みたい」⁵⁵⁾とか、「過度の勉強と人一倍ハードトレーニングする彼に兩立は適しなかつたかも知れない、一年位水泳界より遠ざかつてゆつくり精養し來るべき大會に献身されんことを喪心より望む」⁵⁶⁾とも言われている。清川の順位は2位であるが、次世代の台頭によって、厳しい評価を受けている。

注目度の高い清川の状態については大会の度に取り上げられているのだが、清川はこのころの自身の状態について「私はこの頃からいわゆる「スランプ」」⁵⁷⁾として、次のように回顧している⁵⁸⁾。

「昭和九年、私が大學二年の時の事である。夏の全日本選手権大會に備へて練習を開始したのであるが、どう云ふものかサッパリ調子が出ない。

その前年の秋の神宮大會には四百米背泳に世界新記録を作つた事でもあり別に健康の方に異常がある譯ではなく、それかと云つて練習方法も大體前年迄の經驗を基礎にして豫め作成したスケジュールに依つてゐた關係から、もう此の位のレコードが出なければならぬ時期だと思ふのに一向調子が出て來ない。記録を取つてみても昨年度の夫れに遙かに及ばない様な状態である。

大會期日は段々切迫して來るし、その上他の連中の練習記録の評判が耳に入つたりして氣持は焦る一方である。」

清川は、こうした状態で8月11～13日に開催された昭和9年度全日本水上選手権大会に臨み、苦しい成績となった。男子100M背泳ぎと男子200M背泳ぎに出場し、ともに準決勝で敗退して決勝に残ることができなかったのである。この結果を受け、「兎も角、御大清川が準決勝で落ち様とは！」⁵⁹⁾とか、「清川、河津の不調は嘆かわしい」⁶⁰⁾と厳しい筆致であった。清川が決勝に残らなかったことは、それ自体が大きく取り上げられる出来事であった。清川は、この頃の「新聞では「背泳王、清川墜つ。」などと大きな見出しで書き立てられ、批評家からは痛い言葉を聞かされた苦い経験を持つてゐる。」⁶¹⁾と回顧している。1934年8月12日の『東京朝日新聞』には「「背泳清川」墜つ」という見出しが掲載されていた(図1)⁶²⁾。清川は自身の成績に関する厳しい筆致を目にしていたのである⁶³⁾。

清川に対する厳しい論調は、次の大会でも継続

するものであった。1934年9月14～16日に神宮プールで開催された全日本学生水上競技大会では、全体的に「選手の快調は当日の良コンディションと相俟つて好記録續出、日本選手権大会で見た沈滞さは全く消し飛んで世界新記録四つと言ふ素晴らしい収穫を挙げた」⁶⁴⁾のである。ここで清川は決勝に残ったのだが、「元氣なき清川の惨敗は致し方ない」⁶⁵⁾とされた。清川は優勝しなければ敗れたことになる。田畑は次のように論評している⁶⁶⁾。

「清川君も身體も疲れてゐるだらうが、それよりも泳ぎそのものが斷然悪くなつてゐる、五十メートルはまだしも百メートルに至つては徒らにローリングするといふよりむしろ徒らにもがいてゐるとしか見えない、オリンピック當時の映畫を見てその泳法をとりもどすことが先決問題である。……清川、河津兩君の健在は日本背泳陣の爲に絶對必要であ

全日本水上争覇第一日

「背泳清川」墜つ

ハイランドも失格

收穫は小池、前畑の記録更新

米國三選手を迎へて幕を開けた昭和九年全日本水上選手権大会第一日は、驚きと感動の嵐もなだた一日午後六時から神宮プールで二百米自由形競争から開始された、東風の微風で気温は三十度、水温は二十四度であつた、この日小池君、前畑君によつて、二百の年日本新記録が更新され千五百米自由形競争の途中五百米において根上君が六分一三秒四の非公式日本記録が作られた、これが第一日の収穫として上げられるがこの日の番には、二百メートル自由形競争決勝に入つて米國ハイランド君が水上日本の勢力の前に第一の血祭に上げられた事であり百メートル背泳決勝で清川君が一敗地にまみれ失格して世界の背泳トリオの一角が崩れたことである

記録

- ◇二百米自由形競争 最高記録及び入選者二分一九秒杉浦(見村中)ハイランド(米國)松原(日大)渡辺(日大)志村(稻沢)
- 中村(中泉)坂上(稻沢)杉本(日大)田端(三田)中村(日大)田口(京武)林田(皇武)大橋(明大)徳口(京武)新田(聖博)
- ◇百米背泳競争 最高記録及び入選者二分二秒四ウエー(米國)勝久(稻沢)明小松(河津)明大(吉田)佐伯(松下)需(清川)露大(谷口)稻沢(山田)明大(入江)稻沢(河野)明大(井上)三田(下田)田中(中)
- ◇百米平泳競争 最高記録及び入選者一分一四秒六(日本新記録)小池(三田)日本新記録(日大)川渡(沼津)聖(日大)高島(三田)山田(聖博)長久(三田)廣(明大)杉浦(聖)

- ◇千五百米自由形競争決勝【A組】一分一六秒八根上(聖博)2 水見(稻沢)3 那須田(中泉)【B組】一分一五秒五〇砂メデイカ(米國)2 石原田(明大)3 寺田(見村中)【C組】一分一四秒四本田(聖博)2 牧野(稻沢)3 寺田(關東)
- ◇二百米自由形競争決勝【A組】一分二〇秒六杉本日(聖博)2 小池(三田)3 田中(中)
- ◇二百米自由形競争決勝【B組】一分二〇秒六杉本日(聖博)2 小池(三田)3 田中(中)

図1 「全日本水上争覇第一日 「背泳清川」墜つ ハイランドも失格 收穫は小池、前畑の記録更新」『東京朝日新聞』1934年8月12日、3面

る。」

清川は、泳ぎ方に問題があると指摘され、復調するにはロス五輪の時の泳ぎ方を取り戻す事が推奨されている。成績が好転しない清川は、それによって、むしろ日本の背泳ぎ陣の柱であることが強調されるようになる⁶⁷⁾。

こうして清川の成績について様々な評論がなされるなかで、清川自身は状態を好転させるために何をしたのか。以下、長文になるが引用する。

「私の「スランプ」の場合はどうしたかと云ふに、先輩の忠言もあり色々考へた揚句に豫め／＼知人のアメリカ人が軽井澤に別荘を持つて居て遊びに来ないかと誘はれてゐたのを幸に、思ひ切つて夏休みを全部そこで過してみる事に決心したのである。

そして毎日、ゴルフを習つたり、離山へ登つたり、鬼押出や養狐場へハイキングしたり、自転車で碓氷迄遠乗りしたり、凡そ「水」とは関係の無い生活をし、水泳の事を一切忘れて生活してみたのである。

「陸に上つた河童」と云ふ言葉があるが、如何に避暑地であるとは云へ、水泳選手が暑中に全然水に浸らずに暮らす事は仲々苦痛な事であつた。

併し、斯うして夏休を経へ、秋になつてから東京へ歸つてインター・カレッジに對する練習を開始したのであるが、毎日の練習に對する自分の氣持が以前とまるで違つた新鮮味を帯びて居た事を覺えて居る。そして試合の成績も以外に良好で五十米背泳には日本新記録を作つて優勝と云ふ好成績を収める事が出来たのである。」⁶⁸⁾

清川は、一定期間、自分が身を置く競泳の世界から離れるという選択をしたのであり、それを後押ししたのは身近な人であつたようである。この選択は、清川が大学生として全日本水上選手権大会や全国学生水上競技大会を目指しながらも、そ

の先にベルリン五輪を位置づけていたためのものであるとも考えられる。国内の大会は五輪に向かううえでの自身の競技成績を確認する場なのであり、両者は連続的なものである。ともあれ「水泳の事を一切忘れて生活してみた」ことにより、清川自身としては、状態が好転したという実感を得たようである。

いっぽう、個々の大会は有力な選手を発掘するという意味でオリンピックを見据えたものになっていくのだが、全日本中等学校大会は、「ロスアンゼルスで空前絶後の活躍をした人たちも大部分此の競技會から巢立ちした」のであり、「恐らく今年も来るべき伯林大會を約束される選手が多数含まれてゐるであらうと思ふとき、數多く行はれる競技會中此程重要な且つ興味深い會は全く無い」⁶⁹⁾と考えられていた。ロス五輪では中等学校の選手が多数活躍したために、ベルリン大会に向けても、同じように、全日本中等学校大会から代表選手が生み出されることが期待されている。

1934年の最後の水連機関誌『水泳』では、「一九三四年は一九三五年に移らんとして、愈々ベルリン大會にひとけた近く、吾々は總ての注意を西に向けてその準備工作に萬全の努力を拂はなければならない」⁷⁰⁾と結ばれ、1934年の水泳シーズンは幕を閉じた。

2-3. ベルリン五輪の前年

ベルリン五輪の前年の1935年に入る前に、水連は1935年の年間計画を発表した。以下の日程は、他の大会との兼ね合いもあり、後に調整されることになるのだが、水連は1935～1936年の一連の大会でベルリン五輪の代表候補選手を選出することになる。第一次予選会は8月10～12日までの日本選手権大会、第二次予選会は10月11日～13日までの明治神宮大会、第三次予選会は1936年の年度始めに開催し、最終予選会は6月頃に開催することとし、これらを経て代表選手が決定されることとされた。また、代表候補選手には、合宿練習も実施することになった⁷¹⁾。選手選

考の日程を予選会の前年に出しておくことで、オリンピック出場を目指す選手は、その日程から逆算して年間の練習や出場する大会の計画を立てることが可能になる^{72) 73)}。

これまでは、いくつかの大会ごとに運営母体同士での調整不足があり、大会の日程が度々問題となっていた。それは、水連にとって「数年来の懸案だったインターカレッジ統制問題」であった。そこで末弘、松澤、田畑をはじめとする水連の幹部を中心に「特別委員会を編成し一路全国的統一を目指し」たのである。そして「全国學聯、關西學聯、東海學聯との完全なる提携成り、長年の宿案たる學聯組織の合理化、強化も一段落をつけ、昭和十年度は愈々東京に於て華々しく事実上の全日本學生水上競技會が開催」されることになった⁷⁴⁾。水連が学生諸連盟との関係性を構築すると同時に、大会の日程調整が施されたのである。こうして「オリンピックに關する限り對策が理づめで計畫的」⁷⁵⁾と言われるようになったのである。

そして、1935年6月9日に早慶対抗水上競技大会が神宮プールで開催された。この大会は「來年のベルリンオリンピックに對して今シーズンにおける各選手の實力の消長は直ちにオリンピック連覇如何に關はる」⁷⁶⁾として、ベルリン五輪に向けて1935年のシーズンの口火を切った大会である。ここで背泳ぎについて「ロスアンゼルスの名トリオすでに老いたる今日、次の世界爭覇を明年に向へて、現日本の背泳陣は奮起一番大いにガンバル必要がある。特に日本チームの中心を成すインターカレッジ選手において然りとする」⁷⁷⁾とされている。ロス五輪の100M背泳ぎで3つメダルを獲得した「名トリオ」に替わる選手が大学から台頭することが期待されている。

そして、水連を中心に第2回日米対抗水上競技大会の準備が進められていくことになる。6月12日の第二回準備委員会では、日程調整の結果、日米対抗に向けた予選会の日程が8月3・4日に決定された。そして、「前回準備委員会にて松澤主事附託となった豫選會の期日の件に就き、松澤主

事より他の競技會と交渉の結果、八月二、三、四日開催豫定の全國高等學校水上競技會を八月一、二、三日（三日は晝間水球のみ）と變更し、八月一日開催豫定の青年團競技會を八月三十一日に變更する事の交渉成り、日米豫選會の期日を八月三、四日とする事の出來た旨報告」⁷⁸⁾された。松澤を中心とする水連の働きかけによって、他の大会の日程が変更されている。これに加えて、「日米豫選會に地方有力選手を出來得る限り出場せしむる様、松澤主事より個人的に連絡を取る事」⁷⁹⁾にもなった。

続く7月10日の第三回準備委員会では、「日米豫選兼オリンピック第一回豫選に備へて、目下合宿中の各學校の合宿練習を松澤主事巡廻指導する事に決定」⁸⁰⁾した。日本の水泳競技のスタンダードを発信できる地位にいる松澤が、各学校に直接出向いて松澤のスタンダードを伝達することである。

そして、8月3～5日にかけて第2回日米対抗水上競技大会の予選会が開催された。清川は日米対抗戦の予選会の背泳ぎ100Mと200Mともに決勝で4位という結果であった⁸¹⁾。この予選会の結果を受けて、「何んと言つても往時の強豪牧野、宮崎、清川等の不振の聲は期待を持つ者をして憂慮させた」のであり、「第拾回ロスアンゼルスの名トリオと稱された背泳陣の凋落不振は心細いもの」とされた⁸²⁾。この結果を受け、清川は第2回日米対抗水上競技大会に選出されなかった。それでも、水連は、28名のオリンピック候補選手を選出し、そこに清川は含まれていた⁸³⁾。

いっぽう、背泳ぎについては、継続的に新進の選手がクローズアップされている。このころには、全国中等學校水上競技大会などで顕著な成績を残し始めた吉田喜一に注目が集まるようになっていた。吉田は「日本一流の選手として顔を揃へるには物足らず、清川、河津、入江の諸豪と比べると二_ニ乃至三_三の差があった」のだが、「吉田のさうした健闘は日本背泳の將來を背負って立つ者」とされていた⁸⁴⁾。そして、第2回日米対抗水上競

技大会の予選会で100M背泳ぎと200M背泳ぎでともに優勝したのは佐伯中の吉田喜一であった⁸⁵⁾。

そして、8月17～19日に第2回日米対抗水上競技大会が神宮プールで開催された。吉田喜一は第2回日米対抗で100M背泳ぎと200M背泳ぎに出場し、「しかもそれが清川のもつ二分三十六秒二を突破した日本新記録」⁸⁶⁾であった。「オリンピックの最高峰を目指す吉田、懸の大会から全中等学校の王座へ、それから日米大会へと、堅實な階段を登って遂に日本新記録まで樹立した彼の前途は、必らずや次に踏み越ゆべき階段のオリンピックにも敢然として躍進出来るのではないか」⁸⁷⁾とされた。長らく「背泳トリオ」に替わる新進の背泳ぎ選手の台頭が待たれていた中で、吉田には大きな期待が寄せられたのである。

9月13～15日に神宮プールで第14回全国学生水上競技大会が開催された。この大会は、「張り切ったといふ点ではおそらく今年の大會位張り切ったことはめづらしく」、そうした場の雰囲気を作り出した背景に「日米對抗の刺激とオリンピックを明年にひかへてゐるといふことが母校の爲に奮戦するといふインターカレヂ特有の緊張に一段と拍車をかけた」⁸⁸⁾ことがある。迫りくるオリンピックが、大会の雰囲気をも変えていくようである。この大会で、清川は100M背泳ぎで優勝、200M背泳ぎで準優勝した⁸⁹⁾。

さらに、10月4～6日に競泳のオリンピック第2回予選会として8回明治神宮体育大会兼昭和十年度日本選手権兼第11回オリンピック予選が開催された⁹⁰⁾。この大会について松澤は次のように述べている⁹¹⁾。

「選手権種目は前に述べたやうに選手権争奪、オリンピック豫選、オリンピックの準備練習等數多への目的を持ったものであるが、そのために競技を見る我々の心持には矛盾した要求が湧いて來るのであった。

オリンピック練習や選手権のためには一流選手

の参加が必要であるが、オリンピックの第二回の篩落しをするには既に残った大粒は面倒くさいからゐない方がよいともいへる。」

予選会の回数が増えていくと、選考する側も悩ましさを感じるようになる。一人ひとりの選手が良い記録を出すことを期待する一方、それによって誰を代表に選出するのかの選択肢が増えることになる。「篩落し」をする側は、絶えず悩むことになる。ただ、この大会の「背泳ではオリンピック候補者間の素晴らしいレースとなったが100米では遂に1分10秒を割ることが出来ず」⁹²⁾であったとされ、清川は100M背泳ぎで3位、タイムは1分11秒4であった⁹³⁾。

それでも、清川への期待は依然として高く、座談会では必ずといっていいほど名前が挙がっており、学生連盟戦の100M背泳で1分10秒6を記録したことや、神宮大会の成績を踏まえると「清川が案外やれるかも知れない」とされている⁹⁴⁾。

1935年の競泳シーズンは、オリンピック予選会を兼ねた明治神宮大会をもって終えることになる。松澤は1935年を振り返って、「今年中に日米對抗を済ませ、秋の明治神宮大會には來年の選手候補者をも決定し、遠征チームの陣立も近い内には整備出来る所まで準備は十分やることが出来た」⁹⁵⁾とし、ロス五輪からベルリン五輪にかけて「男子競泳チームでは牧野、石原田、小池、遊佐、清川、河津、それに宮崎、女子競泳では前畑一人だけが今度の候補者中に加へてゐるだけである」⁹⁶⁾としている。しかし、「一番心配されてゐるのが背泳でありまた今の所どうにもこの種目は實力が劣つてゐることを事實である」⁹⁷⁾として、背泳ぎの現状が案じられている⁹⁸⁾。

2-4. 最終予選とベルリンへの出発

1936年は、ベルリン五輪が開催される年である。これに向けて競泳オリンピック候補選手の第1回の代表合宿が、東京九段軍人会館を拠点に1935年12月25日～1936年1月7日まで開催され、

「近くの靖國神社脇の東京大一市立中学校の設備最新を誇るプール及體操場を中心として基礎練習を第一歩から踏み出す事が出来る様」⁹⁹⁾になった。

この合宿に関して松澤は、「皆の態度が實に恐ろしい位に眞面目であつた。外國に行ければよいなどと考へて居るものは一人も居ないのだ。プールの練習はもとより體操でもその他の動作でも本氣に強敵を相手にもう戦つて居る氣持、たゞ勝たねばと云ふ氣魄が感ぜられる・・・略・・・ロスアンゼルス・オリンピックアードの前の正月の合宿に比較すると雲泥の相違だと云ふ感が深い」¹⁰⁰⁾という。さらに清川は、「來年のベルリン大會で再び世界の覇權を握らんが爲には、此の冬季の休暇こそ最も重要視されるべき期間ではあるまいか」¹⁰¹⁾と述べている。代表候補選手たちのベルリン五輪への意気込みが語られている。

しかし、合宿を終えて間もなく大学を卒業して1936年度から就職する清川は「社会人になるから、生活様式が變り、練習が存分出来るかどうか氣に病んでゐる」¹⁰²⁾という状況であつた。清川は、社業と並行してベルリン五輪に向けての練習を進めていくことになる。したがって、「群雄割拠の背泳は・・・百_{メートル}の巧者清川のスピードが最も好調であつた場合、清川の優勝が考へられるが、就職したハンディキャップはかなりの重荷だらう」¹⁰³⁾という見解もあつた。

清川の置かれる環境は変わったが、それでも、1936年度に入りベルリン五輪に向けた予選会が開催されていくことになる。5月23・24日に第三次予選会が開催され、関東は神宮、関西は宝塚が会場となった。そして、最終予選会は5月29～31日に神宮プールで開催されることになった¹⁰⁴⁾。

1936年日本競泳選手権大会オリンピック最終予選会が5月29～31日に神宮プールで開催された¹⁰⁵⁾。100M背泳ぎは、1位は児島泰彦で1分10秒2、2位は明文一で1分11秒2、そして清川は1分11秒4で3位を記録し、それぞれは代表選手に選出されることになった¹⁰⁶⁾。この結果を受

け、「清川は就職の關係上、春の合宿練習も半ばにして任地に行き、練習も不十分と想像されたのに昨年カムバックして氣勢を揚げた勢ひをかり」、「清川なほ健在」を印象づけたのである¹⁰⁷⁾。この最終予選会を経て、競泳の日本代表選手が決定した。

水泳の選手団は、6月11日にベルリンに向けて出発することになる。この日の選手団は、「恩賜のプレザーコートに身を固め、旗手清川正二君の掲げる日章旗を先頭に先づ明治神宮へ參拝、二時には宮城前に到つて遙拝式を行ひ、午後三時から神宮プールで最後の練習を行つて午後七時半日本青年館を出て丸ビル一階の一三八號室で休憩、八時四十分東京驛に向ひ午後九時同驛發の列車で遠征の途に就く」¹⁰⁸⁾予定とされた。清川は出発するにあたり「祖國日本の名に於て正々堂々と技を競ひ、スポーツを通じて眞の日本の姿を世界に示して來たいと固く決心してをる次第であります」¹⁰⁹⁾と述べてベルリン五輪に向かうことになる。

3. おわりに

3-1. 水連の戦略と社会の眼差しの狭間を生きるメダリスト

本稿では、1932年のロス五輪で金メダルを獲得し、そこから4年後のベルリン五輪で再び金メダルの獲得を目指した清川正二にとっての4年間の経験について、清川が出場した大会と、清川が出場した大会を中心として、水連を中心とする清川を取りまく諸アクターとの関係性のうちに論じるところを試みた。ここでは、若干の考察を加えて本稿のまとめにしよう。

ロス五輪を終えて間もなく末弘、田畑、松澤らをはじめとする水連の幹部はベルリン五輪に向かう計画を立て始めた。大会のあり方、関連団体との連携、選手発掘の方法、練習方法の浸透といった面を再編あるいは刷新しながら4年の時間を有効に活用していくことになる。これらを通じて、

日本の水泳界における水連の地位は確かなものになるとともに、競技力志向の体制が整備されていくことになる。水連はロス五輪で活躍した選手に引き続き期待を寄せつつ、新たな選手の台頭を見つけ出す仕組みの構築を企図したのである。

水連のベルリン五輪に向けた計画とともに、人びとはメダリストに対して眼差しを向けることになる。特にロス五輪で活躍した選手に対しては、水連の関係者はもとより、新聞や雑誌で取り上げられている。ロス五輪で有名になった選手は出場する大会の一つひとつについて様々な批評が加えられている。ロス五輪後の1932年の大会に限っては、メダリストが出場するだけで凱旋の意味が込められて歓迎されるので、「辛口」の批評はほとんどなされない。しかし、翌1933年になると人々の気持ちはベルリン五輪に向き直されるためにリセットされ、一人ひとりのメダリストに対して大きな期待をかけることになる。それゆえ、個々の選手の状態については大会前から話題に挙がり、大会後には過去の記録を参照しつつ、大会での結果に基づいて批評される。たとえ、大会で優勝したとしても、記録が芳しくないと判断されれば、必ずしも讃えられるわけでもなく、また、出場していない大会でも比較のために持ち出される。新進気鋭の選手が待望される中ではそうした選手が登場すると、そちらに人びとの関心が寄せられ、いつしか「ベテラン」とみなされる。こうして古参と新鋭という構図が作り上げられることになる。

清川自身が、多方面から批評される状況に置かれることになるのかを、どれほど見通していたのかは定かではないが、ロス五輪を終えてすぐさまベルリン五輪に照準を合わせたのであった。「メダリスト」であるという社会的属性を引き受けながら清川が刻んだ4年間は、批評に晒され続ける時間であった。メダリストや優れた選手の何名かの選手は出場する大会と出場しない大会を選択している節があるなかで、確たる理由を浮かび上がらせることはできなかったものの、清川は出場権

のある大会にはほとんど出場していた。注目度の高い清川は、どの大会に出場したとしても、また、大会に出場していなくとも、多くの場面で批評や比較の対象とされた。スランプの時期にも大会に出場し続けて芳しくない成績だった時には、自身を酷評する記事に眼を通していたことも事実であった。そこでは、一人ひとりの個別の経験とそこでの試行錯誤が重要な問題になってくる。また、清川はベルリン五輪が開催される年度に就職したことから、社業と両立する必要性から練習する時間にも制約が生まれてくる。成績的には、大きな影響は見えないかも知れないが、それでも、清川にとっては競技と社業を「うまく」両立する必要がある、そこで個人的な自己管理の方法を案出していると考えられる。オリンピックアードという時間制限を踏まえると、そうした個人的なライフステージとの兼ね合いも重要な点ではないだろうか。

4年のサイクルの終わりは、オリンピックに価値を置く人たちを再び4年のサイクルに組み入れ、そうした認識を強化することになる。こうした状況下で清川は、水連の戦略や社会の眼差しの狭間のなかで「メダリスト」としてオリンピックアードを過ごしたのである。それは、確かに清川の個人的な経験以上のものではないかもしれない。しかし、それは「個々の事例であるがゆえに、歴史的個体としての一人ひとりにとって、抜きさしならぬ意味をもつ」¹¹⁰⁾のである。

3-2. 再びオリンピックアードへーベルリン五輪から東京五輪へー

さて、ベルリンに到着してからについて、清川は「到着の日の午後から直に練習を開始致しましたが、懸念して参つた気温も水温も、太陽さへ出て居れば日本のそれと餘り變りありませんので、此處六日間の猛練習で選手一同完全に水に慣れ切つて了ひました」¹¹¹⁾としている。練習では、1分6秒0を記録し、日本には「清川の好調」¹¹²⁾が報告されている。しかし、清川は「主将としての

立場から若い選手を率いるために多少無理しても練習に励んだせい」もあり、「『コンディショニング』の誤りを犯してしまった」という実感もあったようである¹¹³⁾¹¹⁴⁾。こうした状況にあって、清川は3位という結果であった。

日本としては、メダルの数は18個であったし、なかでも、水泳は金メダル4、銀メダル2、銅メダル5であった。また、このベルリン五輪の開会式の前日の7月31日に開かれたIOC総会で、次回大会の開催地が東京に決定していた。これらのことは、国民的熱狂をさらに過熱させるもの¹¹⁵⁾であるし、選手や組織を東京五輪へ向かわせるものでもある¹¹⁶⁾。清川正二は次のように述べている¹¹⁷⁾。

「今回の成績としては皆さんの御期待にそふことができなかったと思いますけれども、この次の東京大会には、この度得た多くの経験を基にしまして、今度こそいよいよ、世間でよくいう三度目の最も大切な勝負でありますから、今度こそは、運も何もない実力で勝ったといふような成績を、今度の尊い経験を基礎にして確保するやうに、先ほど松沢さんたちもいはれましたけれども、明日からでも準備し、この次のために備えるように、私たちとしましては既に帰りの船中でその準備の第一歩を踏み出してきたと皆さんに御報告して私の責を塞ぎたいと思ひます。」

そしてまた、それぞれのオリンピックという経験が始まっていくことになる。

〔付記〕本研究は「十五年戦争下のスポーツ政策に関する歴史学的研究」(JSPS 科研費 20K19583)、ならびに、令和3年度日本体育大学学術研究補助費「オリンピック人にとってのオリンピックーロサンゼルス五輪(1932)からベルリン五輪(1936)に向かう競泳選手たちの経験ー」の成果の一部である。

註・引用および参考文献

- 1) 清川正二『オリンピックと60年ーJOCへの提言ー』ベースボール・マガジン社、1989年、p.17.
- 2) 同上、p.17.
- 3) 尾川翔大「母校の校歌になったオリンピック：ロサンゼルスオリンピック(1932)をめぐる牧野正蔵と宮崎康二の代表意識」『オリンピックスポーツ文化研究』第6号、2021年、pp.53-72.
- 4) 清川正二は、戦後のスポーツ界の主導的立場を務めた人物としてよく知られている。1969(昭和44)年にIOC委員に就任した清川は、1975(昭和50)年にIOC理事となり、1979(昭和54)年にIOC副会長になった。また、1946年に日本水泳連盟常務理事となり、1964(昭和39)年に国際水泳連盟の名誉主事となり、1968(昭和43)年には国際水連総会において「終身名誉会員」に推薦され、最高榮譽である「FINA Gold Medal」を授与される。清川は戦後、IOCや水泳連盟といった組織の中で確かな立場に就き、ときにその活動を牽引する存在であった(前掲1、pp.257-268)。
- 5) 佐々木浩雄「『日本代表』の誕生(1912-24)ーオリンピックへの参加とスポーツの国家的意義」有元健、山本敦久編『日本代表論ースポーツのグローバル化とナショナルな身体ー』せりか書房、2020年、pp.78-105.
- 6) Andreas Niehaus. Swimming into memory: the Los Angeles Olympic (1932) as Japanese *lieu de mémoire*. In : Andreas Niehaus and Christian Tagsold (eds.). *Sport, Memory and Nationhood in Japan : Remembering the Glory Days*. Routledge, 2017. p. 30.
- 7) Rikuma Sasaki, Kohei Kawashima. The Birth of Sports Medicine in Prewar Japan: A Perspective on Its Ideological and Organizational Origins. *The International Journal of the History of Sport*, 38 (8), 2021, pp. 913-

933. スポーツ医学者と競技団体が結びつき競技力の向上が目指されていく中で、清川は1933年の明治神宮大会において「スポーツ選手としての私が、自ら「科学の実験臺」に立った」ようである。この実験は「昭和八年九月及十月に於て全國大學高等專門學校水泳大會、明治神宮水泳大會に神宮プールで行ったものが主で補助実験の一部はY・M・C・Aプールで行ったもの」(清川正二「スポーツと科学(二)」『スポーツの随想』文化研究社, 1943年, p.193)とされている。その成果は、「一流水泳選手の競泳後に於ける極大酸素負債量並に脈搏呼吸血圧體温及尿の變化に就て」(同上, p.190)というものである。これについて清川は「夙くより「スポーツに於ける科学性」の必要さを痛感してゐた私は、本実験實施當時、時間的には可成りの制約を受けてゐたのであるが、萬難を排して協力を申出た。そして私のこの努力はやがて満足すべき成果となつて報ひられたと云ふのはその後間も無く私は四百米背泳に於て世界記録を作る事が出来たからである。」(同上, p.190)と述べている。

⁸⁾ Mark Dyreson. Imperial 'deep play': reading sport and visions of the five empires of the 'New World', 1919-1941. *The International Journal of the History of Sport*.,28 (7), 2011, pp. 2432-2435.

⁹⁾ 高橋圭三、清川正二「今は夢、金メダルを独占の水泳王国・ニッポン 高橋圭三対談」『財界』第24巻第16号、1976年、p.98.

¹⁰⁾ 山本須美子「スポーツの記憶と歴史」石井隆憲編『スポーツ人類学』明和出版, 2004年, p.98.

¹¹⁾ 近代オリンピックは1896年に第1回大会がアテネで開催されて以降、古代オリンピックの慣例にならい、——「Tokyo 2020」は異なったが——4年に1度の周期で開催されてきた。第2回のパリ競技大会は1900年、第3回のセントルイス競技大会は1904年とし、基本的にはこの慣例に則って現在に至っている。この

4年の周期は「オリンピックアド」と呼ばれている。

2020年版の「オリンピック憲章」では「オリンピックアドは連続する4つの暦年からなる期間である。それは最初の年の1月1日に始まり、4年目の年の12月31日に終了する」(国際オリンピック委員会『オリンピック憲章』公益財団法人日本オリンピック委員会, 2020年, p.18)とされている。

しかし、かつての「オリンピックアド」は異なっており、例えば2000年版の「オリンピック憲章」では「「オリンピックアド」とは、連続する4年間を意味する。各オリンピックアドはそれぞれの「オリンピックアド競技大会」の開幕で始まり、その次のオリンピックアド競技大会の開幕とともに終了する」(国際オリンピック委員会『オリンピック憲章』公益財団法人日本オリンピック委員会, 2000年, p.16)とされていた。なお、本稿と位相は異なるが、おそらく「オリンピックアド」という4年の時間を軸にしてオリンピックの世界史を構想することが可能である。オリンピックに価値を見出す人びとは4年のサイクルで物事を考えるのだが、それはオリンピックが世界の政治や経済に影響を及ぼすことが自明のことになって久しい今日、構想されてよい。これについては、佐藤正幸「人は歴史的時間をいかに構築してきたか」『岩波講座 世界歴史1 世界史とは何か』岩波書店, 2021年, pp.85-112から着想することができるはずである。

管見では、現行のオリンピックアドは2004年版の「オリンピック憲章」からである。本稿における「オリンピックアド」は、現行の「オリンピックアド」ではなく、かつての「オリンピックアド」を意味している。

¹²⁾ 「オリンピックに對する國民の關心」『アサヒスポーツ』第10巻第19号、1932年、p.7.

¹³⁾ 松澤一鶴・島崎保正・藤田明・杉本傳「空前の大勝利を博した男子競泳：女子競泳と男女

- 飛込にも初めて入賞す』『アサヒスポーツ』第10巻第21号（臨時増刊号），1932年，p.27.
- 14) 「神宮プールで妙技再現－昨夕歓迎報告会」『朝日新聞』1932年9月9日，7面.
- 15) 末広巖太郎「オリンピック代表を迎ふ」『水泳』第14号，1932年，p.4.
- 16) 松澤一鶴「昭和九年水泳界は凶作か」『水泳』第27号，1934年，p.3.
- 17) 水連の今後の方針について田畑政治は次のように述べている。「日本全國民を――年寄も子供もすべて泳ぎの出来るやうにする事，即ち水泳日本の實現がその理想である．これと同時に，四年に一回づゝ行はれて世界選手権を決定するオリンピック大會が嚴存する以上，これに出場して優勝するという事も亦，水上聯盟の一つの大きな事業である．」（田畑政治「水泳普及運動の意義」『水泳』第16号，1933年，p.3）.
- 18) 「日本水上競技聯盟會報」『水泳』第15号，1932年，p.40.
- 19) 同上，p.41.
- 20) 同上，p.41.
- 21) 安倍輝太郎「オリンピック對外影響」『水泳』第17号，1933年，pp.14-15.
- 22) 清川正二『私のスポーツの記録－オリンピックと共に半世紀－』ベースボール・マガジン社，1984年，pp.82-83.
- 23) 小林栄三「全國學生水上選手権大會」『アサヒスポーツ』第10巻第23号，1932年，p.19.
- 24) 「昭和七年度日本選手権水上競技大會」『水泳』第15号，1932年，p.25.
- 25) 島崎保正「オリンピック選手の出場寡なく淋しかった全日本水上大會」『アサヒスポーツ』第10巻第23号，1932年，p.20.
- 26) オーストラリア水泳連盟より，日本水泳連盟に対し，宮崎と清川の欧州派遣を求める電報が届いた（「わが選手招聘」『朝日新聞』1932年10月8日，3面）．しかし，水連は，兩人が學生選手であることから，これを断った（「水連盟豪州の招聘を断る」『東京朝日新聞』1932年10月13日，3面）.
- 27) 松澤一鶴「競泳の冬季練習その他」『アサヒスポーツ』第11巻第2号，1933年，p.28.
- 28) 松澤一鶴「水泳と季節外の運動」『アサヒスポーツ』第11巻第26号，1933年，p.29.
- 29) 「対談 一日一回 “ドキドキ，ハアハア”」『実業の日本』Vol.80 No.1903，1977年，p.66.
- 30) 清川正二「シーズン初めの練習を選手に聴く」『水泳』第24号，1934年，pp.8-9.
- 31) 清川正二「金メダリストとしてIOC委員として 清川正二元IOC副会長に聞く五輪秘話」『ロアジール』第12巻第10号，1988年，p.6.
- 32) 前掲27，p.28.
- 33) 前掲30，pp.8-9.
- 34) 田畑政治「昭和八年度を顧みて」『水泳』第22号，1934年，p.5.
- 35) 松澤一鶴「早慶対抗水上競技の印象」『アサヒスポーツ』第11巻第13号，1933年，p.11.
- 36) 萩原政人「東都十二大學水上競技の印象－法政の肉薄を退け日大優勝す」『アサヒスポーツ』第11巻第14号，1933年，p.10.
- 37) 宍道洋一「昭和八年度日本選手権大會競泳成績」『水泳』第20号，1933年，pp.5-10.
- 38) 松澤一鶴「顧みて選手権の意義を思ふ」『水泳』第20号，1933年，p.4.
- 39) 同上，p.4.
- 40) 松澤一鶴「輝く全日本水上競技の収穫」『アサヒスポーツ』第11巻第18号，1933年，p.6.
- 41) 「牧野奮然，400に世界記録を樹立 遊佐，清川，小池等新記録続出 水上選手権大会終る」『東京朝日新聞』1933年8月15日，3面.
- 42) 前掲40，p.6.
- 43) 藤田明「全日本中等學校東西対抗競泳を観る」『アサヒスポーツ』第11巻第19号，1933年，p.11.
- 44) 同上，p.12.
- 45) 奥野良「接戦に終始した全國學生競泳」『アサヒスポーツ』第11巻第20号，1933年，p.16.

- 46) 前掲 34, p.5.
- 47) 「光る日本新記録 清川 (50 背泳) と遊佐 (200 自由)」『東京朝日新聞』1933 年 9 月 16 日, 3 面.
- 48) 「選手代表宣誓」『水泳』第 21 号, 1933 年, p.8.
- 49) 大会記録員「第七回神宮大会競泳成績」『水泳』第 21 号, 1933 年, p.17.
- 50) 「秩父総裁宮台臨 神宮大会幕開く 500 の選手・水の争覇／競技記録／世界記録続出記録を作る会」『東京朝日新聞』1933 年 10 月 1 日夕刊, 1 面.
- 51) 松澤一鶴「輝く水上競技の収穫」『アサヒスポーツ』第 11 巻第 24 号, 1933 年, p.20.
- 52) 前掲 34, p.5.
- 53) 野田一雄「競泳練習法に就いて」『水泳』第 24 号, 1934 年, p.14.
- 54) 松本隆重「發揮された水泳日本の實力」『アサヒスポーツ』第 12 巻第 14 号, 1934 年, p.17.
- 55) 同上, p.17.
- 56) 松本隆重「極東大会水上記」『水泳』第 25 号, 1934 年, p.8.
- 57) 前掲 22, p.97.
- 58) 前掲 7, 清川, pp.39-40.
- 59) 宍道洋一「昭和九年度競泳日本選手権大会」『水泳』第 26 号, 1934 年, p.9.
- 60) 同上, p.9.
- 61) 前掲 7, 清川, p.40.
- 62) 「全日本水上争覇第 1 日 「背泳清川」墜つハイランドも失格 収穫は小池, 前畑の記録更新」『東京朝日新聞』1934 年 8 月 12 日, 3 面.
- 63) 豪州水泳協会より 1934 年に「メルボルンに於て開催されるビクトリア州百年記念水上競技大会に我が宮崎, 清川両選手招聘の交渉に對し協議したが宮崎選手は病中のため最近の成績を考慮し阪上安太郎君 (早大) を推薦する事となり両君の都合をたしかめた後濠洲に正式変電を發する事と決定」した (「清川, 阪上両君を濠洲へ派遣」『東京朝日新聞』1934 年 8 月 30 日, 3 面). そして, 清川と阪上は 11 月 16 日に神戸から北野丸に乗船し, オーストラリアに向かった (「清川, 阪上両選手出発 少年団代表も同船渡豪」『東京朝日新聞』1934 年 11 月 17 日, 3 面). そして, 1935 年 2 月 19 日に清川, 阪上両水泳選手が長崎に入港した. 両名は「濠洲の國際水泳記録をすっかり破って斷然水泳日本の意氣を示した」 (「水泳 日本の意氣を示した 濠洲遠征の 2 選手長崎へ」『東京朝日新聞』1935 年 2 月 20 日夕刊, 2 面).
- 64) 宍道洋一「第十三回全國學生水上競技大會」『水泳』第 27 号, 1934 年, p.5.
- 65) 同上, p.8.
- 66) 田畑政治「全國學生競泳の印象: 競泳日本の暗雲を一掃して五つの世界記録を樹立」『アサヒスポーツ』第 12 巻第 23 号, 1934 年, pp.18-19.
- 67) 1934 年の後半の期間でオーストラリアから選手の派遣要請: 候補は宮崎と清川 (「濠洲から招聘状」『アサヒスポーツ』第 12 巻第 15 号, 1934 年, p.6).
- 68) 前掲 7, 清川, pp.42-43.
- 69) 「全日本中等学校大會」『水泳』第 26 号, 1934 年, p.30.
- 70) 柴田隆二「編輯後記」『水泳』第 27 号, 1934 年, p.32.
- 71) 「昭和九年度定例代議員會議事録」『水泳』第 26 号, 1934 年, p.35.
- 72) 1935 年 5 月 2 日の理事会で「オリンピックに備へる爲明年夏まで選手の外國派遣を禁止する事」になった. 水連の指示により選手の状態への配慮がなされたのである (「會報」『水泳』第 30 号, 1935 年, p.30).
- 73) 9 月には水連により『「伯林オリンピック」の爲に 第十回羅府オリピック大會水上競技報告書』が出版された. 末弘は「伯林への, そうして更に遠い將來への準備資料として極めて價值多かるべきことを信ずる」と述べており, 報告書をロス五輪にベルリン五輪に向かうものとして位置づけていることがみてとれ

- る（末広巖太郎「序」日本水上競技連盟編『伯林オリンピック』の爲に 第十回羅府國際オリンピック大會水上競技報告書』三省堂、1935年、序）。
- 74) 渡邊寛二郎「全日本學生水上競技の全國的統制成立」『水泳』第29号、1935年、p.2.
- 75) 「年頭の言」『アサヒスポーツ』第13巻第1号、1935年、p.6.
- 76) 花上修二「早慶水上戦を觀て」『アサヒスポーツ』第13巻第14号、1935年、p.19.
- 77) 同上、p.19.
- 78) 「第二回日米對抗水上競抗大會準備委員會」『水泳』第31-32号、1935年、p.52.
- 79) 同上、p.52.
- 80) 同上、p.53.
- 81) 保谷俊平「オリンピック大一回予選日米豫選會」『水泳』第31-32号、1935年、pp.42-43.
- 82) 同上、p.40.
- 83) 「オリンピック大一回予選日米豫選會」『水泳』第31-32号、1935年、p.45.
- 84) 花上修二「中学生で背泳が日本一：水泳界の新人吉田喜一君物語り」『アサヒスポーツ』第13巻第21号、1935年、p.27.
- 85) 日本水上競技連盟編『第2回日米對抗水上競技大会』日本水競技連盟、1935年、p.13.
- 86) 花上修二「中学生で背泳が日本一：水泳界の新人吉田喜一君物語り」『アサヒスポーツ』第13巻第22号、1935年、p.29.
- 87) 同上、p.29.
- 88) 野田一雄「全國學生水上競技大會を顧みて」『アサヒスポーツ』第13巻第22号、1935年、p.4.
- 89) 「第十四回全國學生水上競技大会」『水泳』第35号、1936年、pp.6-7.
- 90) 前掲78、p.58.
- 91) 松澤一鶴「第八回明治神宮體育大會水上競技」『アサヒスポーツ』第13巻第23号、1936年、p.14.
- 92) 同上、p.15.
- 93) 「第七回明治神宮競技水上競技大會兼昭和十年度日本選手權水上競技大會 オリンピック第二回豫選」『水泳』第36-37号、1936年、p.19.
- 94) 田畑政治、奥野良、松浦武雄、根來幸成、宍道洋一、飯田光太郎「競技會を語る座談會（其二）」『水泳』第36-37号、1936年、pp.38-39.
- 95) 松澤一鶴「水泳界の回顧とオリンピックへの期待」『アサヒスポーツ』第13巻第29号、1935年、p.6.
- 96) 同上、p.6.
- 97) 同上、p.6.
- 98) このころ、ベルリン五輪に向けて「各國は1936年6月20日迄に参加すべき種目を申込みべし。7月24日迄に個人及びチームの申込をなすべし。」とされ、各種目の日程も発表された（「第11回國際オリンピック大會水上競技」『水泳』第33-34号、1935年、p.29）。
- 99) 候補者及松澤一鶴「男子競泳オリンピック選手候補者冬季合宿」『水泳』第38号、1936年、p.6.
- 100) 松澤一鶴「男子競泳オリンピック選手候補者冬季合宿」『水泳』第38号、1936年、pp.25-26.
- 101) 清川正二「男子競泳オリンピック選手候補者冬季合宿」『水泳』第38号、1936年、p.8.
- 102) 清川正二「僕の昨年シリーズ」『水泳』第38号、1936年、p.33.
- 103) 木村象雷「オリンピック水上最終豫選の威興」『アサヒスポーツ』第14巻第10号、1936年、p.18.
- 104) 同上、p.18.
- 105) 「昭和十一年度日本競泳選手權大会オリンピック最終予選會」『水泳』第41号、1936年、pp.21-22.
- 106) 「スポーツ／オリムピック水上予選終る 新鋭・躍進目覚まし 牧野は等外、根上・小池も敗る 遊佐・100米に快記録」『東京朝日新聞』1936年6月1日、5面.
- 107) 野田一雄「ベルリン大會目指し興味ある新進の臺頭」『アサヒスポーツ』第14巻第13号、

1936 年, pp.6-7.

¹⁰⁸⁾ 「最後の 1 日迄も猛練習 1 1 日出発の水上軍」『東京朝日新聞』1936 年 6 月 9 日, 4 面.

¹⁰⁹⁾ 「“水の超特急” 出陣譜 「世界的の顔」をずらり 颯爽! 水上日本の誇 駅頭・必勝を誓う主将」『東京朝日新聞』1936 年 6 月 12 日, 11 面.

¹¹⁰⁾ 鹿野政直 『「島島」は入っているかー歴史意識の現在と歴史学ー』岩波書店, 1988 年, p.98.

¹¹¹⁾ 前掲 7, 清川, p.82.

¹¹²⁾ 「ベルリンにおける試泳會」『水泳』第 42-43 号, 1935 年, p.37.

¹¹³⁾ 前掲 22, p.112.

¹¹⁴⁾ 清川は, 「僅かではあつたが, 私自身の競技生活を通じての経験から云つても, 正直な所, 全くの虚心で大試合に臨んだ事は一度も無く, 責任ある試合になればなる程, 抱く不安が大きかつた事を覚えて居る.」と述べている (前掲 6, 清川, p.100).

¹¹⁵⁾ 佐々木浩雄 『日本代表』意識の醸成 (1928-38)

——オリンピック熱の高まりとナショナル・アイデンティティ」有元健, 山本敦久編 『日本代表論ースポーツのグローバル化とナショナルな身体ー』せりか書房, 2020 年, p.127.

¹¹⁶⁾ 水連の機関誌『水泳』では, 次のように記されている. 「皇紀二千六百年, 我が國に於て世界の強豪を集めて第十二回オリンピック大會が開かれるのだ. 今度の大會に於て, 日本の水泳陣が體驗し, 研究したことを参考とし, 再び次の計畫がなされなければならぬ. 全日本の水泳人を動員して四年後の大會に向つて, あらゆる準備と精進がなされるべきだ. 新人出でよ! 全日本の水泳者よ奮起せよ. 再び日本の地に於て, 水上日本を讃へ, その榮譽を謳歌しようではないか.」(「男子競泳の再制覇成る」『水泳』第 39-40 号, p.2).

¹¹⁷⁾ 前掲 22, p.119.

(受理日: 2022 年 2 月 28 日)